

子どもが安心して活動できる学級づくり

—体育科の授業における子ども同士の関わりを通して—

北川圭吾 (M18EP004)

1. 問題と目的

子どもは、学校生活の大半を学級の中で過ごす。学級は学校生活の基盤であり、教科学習・教科外活動など全ての教育活動が営まれる場である。学級が子どもにとって、安心して活動できる場となっていることは、学校教育にとって基礎となるものだと考える。

さらに、学級内で安心して活動していくためには、友だちとの関わりが大きな要因であることは、文部科学省が行った児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査(文部科学省, 2019)によっても明らかとなった。(同調査において、不登校の要因の中で「いじめを除く友人関係をめぐる問題」が 66.6%と次点の「教職員との関係をめぐる問題」の 16.3%と比べても、圧倒的多数となっている。)

しかし、「家庭や地域の教育力の低下、要保護・準要保護家庭、障害のある児童生徒、日本語指導が必要な外国人児童生徒、不登校、暴力行為の増加など、学校が抱える課題が複雑化・多様化するにしたがって、おのずと学校の役割は拡大せざるをえない状況にある。」

(文部科学省, 2017) とあるように、子どもや学校が抱える課題は複雑化・多様化している。こうした現状の中、子どもが安心して活動できる場としての学級をつくり出すことは、より困難さを増していると考ええる。

「生徒指導提要」(文部科学省, 2010)では、教育課程における生徒指導として、「児童生徒に自己存在感を与えること。共感的な人間関係を育成すること。自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助すること。」の3点を特に留意するように求めている。

そこで、本研究では、子どもが安心して活動できる学級をつくるため、個別・集団の課題を理解し、子ども同士の親和的な関係をつくることを目指した。方法としては、教育課程の各教科・道徳・特別活動の中でも、教科の体育科を選択し、先に挙げた生徒指導上の留意点3点を軸に、実践授業を行う。その中で、子ども同士の関わりを活用し、体育科の目標に迫りながら、子ども同士の親和的な関係をつくり上げることとした。

本研究における安心して活動できる学級として目指す姿は、次のとおりある。

- | |
|---|
| a 自由で温かな雰囲気でありながら、集団としての規律があり、規則正しい集団生活が送れている。 |
| b いじめがなく、すべての子どもが学級生活・活動を楽しみ、学級内に親和的な関係が確立している。 |
- (河村, 2012)

2. 方法

(1)対象校 山梨県内公立小学校

(2)期間 2019年4月～11月

(3)児童 小学校6年生 19名

(4)体育科の選択理由

教育課程における集団形成の要となるのは特別活動である。新学習指導要領解説において「人間関係形成・社会参画・自己実現」の3点を旨とする視点とし、各活動・学校行事を通して育成するものとしている。また、「各教科における主体的な学習や対話的な学習を通して、児童同士の信頼関係が深まり、それによ

って特別活動がより充実する。」(文部科学省, 2017)とあるように、特別活動は各教科と往還の関係にあると言える。

各教科の中から体育科に目を向けて考えてみると、新学習指導要領の目標の一つである、学びに向かう力・人間性等を「多様性を尊重する態度や互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなど」(文部科学省, 2017)と解説している。つまり、体育科の資質能力を育成する学習過程は、同時に子ども同士の関わりを促進し、親和的な学級に近づくことに適していると考えることができる。

また、新学習指導要領では、体育科の資質能力を育成するための見方・考え方に、運動を『『すること』だけでなく『みること』、『支えること』、『知ること』(文部科学省, 2017)」と示された。この見方考え方を、本研究としては、友だちと「見合う」「支え合う」「知らせ合う」と解釈した。この見方・考え方を、体育科の目標を達成する過程で有効に活用することで、友だち同士の関わりを促進し、学級の親和性を高めるためにもできると考え、体育科を選択した(図. 1)。

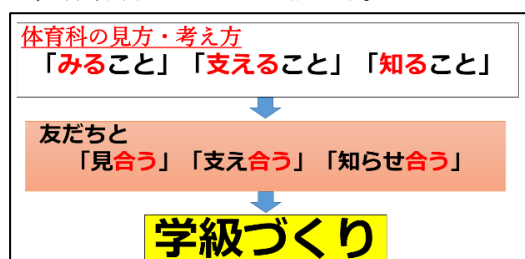


図. 1 体育科における学級づくり

(5) 体育科実践の方法

体育科で授業を行うにあたり、学級の親和性を高めるために、先に挙げた生徒指導提要の3つの点に留意した。

- a 児童生徒に自己存在感を与えること。
- b 共感的な人間関係を育成すること。
- c 自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助すること。

この3点を踏まえ、体育科の見方・考え方から授業での具体的な子ども同士の関わり合いを設定した。

① 具体的な手立て

- ア. 関わり合いを活性化しやすいグループ編成。
- イ. すべての子どもが実現可能なよう、目標設定に幅を持たせる。(技能を難度別に表示)
- ウ. ワークシートにより、話し合いの視点となる知識の共有・共通化。
- エ. ワークシートを用いた指導により、アドバイスの視点を示す。
- オ. 教師が手本となり、補助の仕方を見せる。(体の支え方、声のかけ方など)

② 実践の計画

学級の集団をつくるに際して、学級集団の成長段階にも着目した。

(河村, 2012)の「学級集団の状態を示す目安」を参考に、本研究では体育科における学級づくり指導計画を作成した(図. 2)。(図. 2)にあるように、4月当初、学級が緊張状態にある時には、子ども同士の関わりよりも、教師

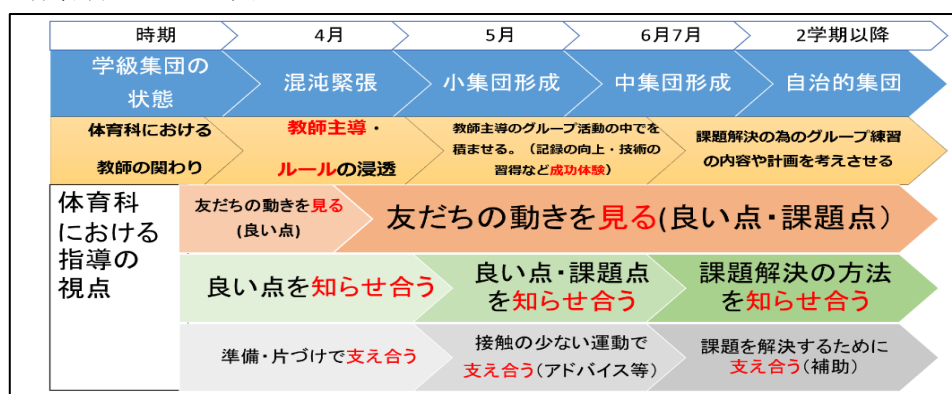


図. 2 体育科における学級づくり指導計画

主導での学級や授業のルールづくりに力を入れる必要がある。体育科においても、授業のシステムやルールの徹底を図り、秩序の中で動くことの大切さを指導する。秩序が保たれることによる安心感を、子ども達にもたせることが目的である。また、授業内での関わりにおいても、教師が中心になりながら、視点を示し、まずは友だちの良いところを見ることから始める。良いところを見つけることに慣れたら、次はそれを友だちに知らせ合い、共有するようにする。友だちと良いところを知らせ合うことで、自身の技術の向上を実感することだけでなく、友だちから認められたことにより、自信の向上にもつながると考える。

ルールが定着するであろう5月以降は、徐々に集団の活動を増やしていく。体育の授業においても徐々に友だちの課題点を見るような指導をはじめ、お互いの課題点を知らせ合うことを通し、技能の習得に役立たせていく。友だちからのアドバイスが自身の記録の向上や技術の習得に有効なことを実感する経験をもつことで、友だちと関わることへの有効感を高めていく。

6月以降は、子ども自身に課題解決の方法や計画を立てさせながら、その手段としてグループ活動を用いていく。体育の授業においては、自分の目標を立て、その目標をグループで知らせ合うことで、互いの目標を共有し、達成のために協力できるようにする。その際、教師は、子どもが関わり合いを適切に選択できるように、アドバイスの視点や補助の仕方などを指導する。

2学期以降は、最高学年として、運動会などの大きな行事を乗り越えるため、子どもが自分の目標と集団の目標を立て、そのための方法を考え、実行していくことになる。体育科でも、組立体操のように互いを支え合う運動が実施するため、また全体の目標達成のため、自分の役割を考えるようにする。

以上のように、学級集団の成長段階に合わせて、体育科の「見合う・支え合う・知らせ

合う」学習活動を意図的・計画的に展開する計画を立てた。

(6) 検証方法

本研究における検証の方法だが、以下の3点を中心に行うこととした。

- | |
|----------------|
| a 体育科アンケートの分析 |
| b 子どものエピソードの記録 |
| c Q-Uの分析 |

① 体育科アンケートの分析

体育科の授業において、単元終了後にアンケートを実施した。アンケートの項目には、「見合う・支え合う・知り合う」の視点を入れ、自分がしているかという視点と、友だちがしてくれているかという視点から、子どもの意識を調査し、その変容を分析することとした(表.1)。

表.1 体育科アンケート質問項目(一部要約)

- | |
|------------------------------|
| ア. 体育の授業は好きですか。(＋5～－5で選択) |
| イ. 運動が上手になるとうれしいですか。 |
| ウ. 友だちが上手になるとうれしいですか。 |
| エ. 友だちと話し合いますか。 |
| オ. 友だちの動きを見ますか。 |
| カ. 友だちをサポートしますか。 |
| キ. 友だちの動きや考えを知ろうとしますか。 |
| ケ. 友だちはあなたの動きを見ていますか。 |
| コ. 友だちはあなたをサポートしていますか。 |
| サ. 友だちはあなたの動きや考えを知ろうとしていますか。 |

② 子どものエピソード

4月から子どもの言動を継続的に記録し、その変容を分析することとした。また、アンケートやワークシートの記述も同様にエピソードとして用いる。

③ Q-U 分析

6月と11月にQ-Uを実施し、学級全体の状態と個別の子どもの変容を比較・分析する。

3. 実践

(1) 授業実践 器械運動(マット運動)

本研究では、体育科の授業において授業の

目標を達成するために、「見合う・支え合う・知らせ合う」という子ども同士の関わりを有効に活用する。先に挙げたように、集団の状態によって、それぞれの関わり方にも段階がある。

ここで紹介する実践授業は、11月に行った検証授業である。マット運動は、個人差が出易く、苦手意識を持ち易い運動だが、一方で、客観的な視点でのアドバイスや、体を支えるなどの補助が、目標達成に有効なため、11月時点の学級の実態に即していると判断した。

(2) 授業実践における具体的な手立てと考察

① 関わり合いを活性化しやすいグループ編成

4月当初は、子どもが安心して活動するため、人間関係を中心としたグループ編成を行ってきたが、学級が集団として成長してきていることから、目標達成に視点を当てたグループ編成を行った。

具体的には、運動会を行ったブロック編成を基本に用いた。運動能力だけでなく、言語能力やリーダーシップなど、総合的な力が均等になるように振り分けられたグループである。運動能力の高い子どもは手本を見せたり、言語能力が高い子はアドバイスの言葉を工夫したりと、互いの特徴を活かした支え合いが期待できる編成である。また、協力することで課題を乗り越えてきたため、自然な支え合いも期待できるグループでもある。



図.3 後転の補助をする子ども

(図.3)のように、友だちの技の完成のため、支え合う姿が見られた。(図.3)では、見学の子どもも、支え合うために手を貸している様

子が見て取れるなど、教師の指示がなくとも、互いに協力しようとする姿が見られた。

② 全ての子どもが達成可能な目標設定

学級内で子どもが安心して活動していくためには、自身の可能性を信じるのが大切である。また、授業においては、目標を達成するなどの成功体験を積ませることでこの自己効力感を向上させていくことが求められている。そこで、技能目標の自己決定を行うことができる体育科の特性を利用し、技能の難易度に幅をもたせ、難度の低い技から高い技まで選択できるようにして、可能性を信じる大切さや成功体験を味わう喜びを得やすくした。

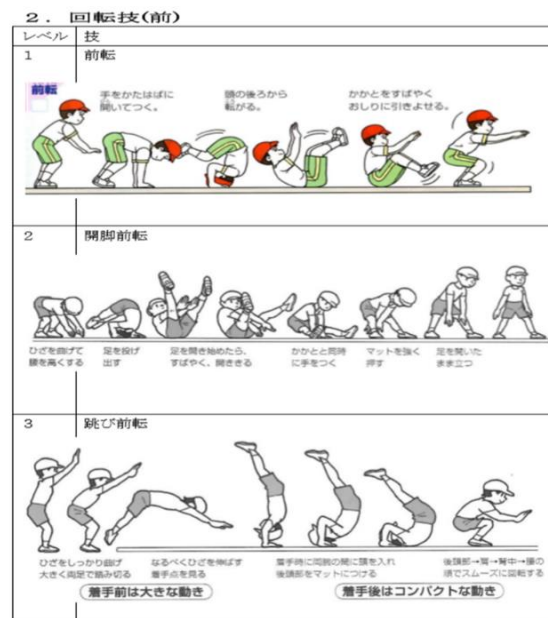


図.4 マット運動ワークシート

(図.4)のように、ワークシートに難易度別の技を記載し、回転技(前・後)や倒立技の中から技を選択し、コツを確認し練習ができるようにした。すべて子どもが、複数の技を習得し連続技へとつなげることができたため、達成の喜びを味わうことができた。

③ 知識の共有・共通化

(図.4)のよう、ワークシートには技のコツを載せ、指導においてもその記載を基に共通確認をするようにした。関わり合いの中でも、重要なのが、子ども達が共通の言葉をもっていることである。同じ視点で話ができる

ことで、適切なアドバイスや補助をし合うことができるからである。

また、言葉で伝えることが苦手な子どもであっても、ワークシートの記述やイラストを基にすることで、自身の考えを友だちに伝えることができ、互いに知り合うことができた。こうしたワークシートは、学び合い・関わり合いのツールとして、非常に有効であった。

④教師が手本となり補助する様子を見せる

体育科の特徴として、友だちへのサポートとして、身体接触を伴う補助がある。目標達成に必要な手立てであることや、安全確保が大前提であることを、学級の全員が共通理解していなければ、トラブルや事故の原因になってしまう部分である。

教師が補助の手本を示し、技に取り組む人の習熟状況により、適切な補助の仕方を指導する。その際、決して強要するものでないことを確認した。また、難度の高い技については、教師の協力を求めるようにした(図. 5)。



図. 5 教師による補助の手本

先に述べたように、協力することの有効性を理解した集団なので、(図. 3)のように、自然と声をかけ、技の完成のため支え合う姿が見られた。

4. 実践おける結果と考察

(1)学級変容から

①体育科アンケートより

体育科アンケートの項目「ア. 体育の授業は好きですか。(＋5～－5 で選択)」では、4 月当初は、嫌いと答えた子どもが 7 名だったのに対し、11 月には 2 名に減少していた。全体のポイントでも、＋13 から＋37 へ増加していた。また「エ. 友だちと話し合いますか。」では、4 月当初 53%の子どもが、話し合っていないと感じていたが、11 月には 0%まで減少し、全ての子どもが、体育科の授業の中で話し合いが行われていると感じていることが分かった。「カ. 友だちをサポートしますか。」では、4 月当初の 41%から、何らかのサポートをしていると感じていたが、11 月には 100%に向上している。

②マット運動授業のワークシートの記述より

表. 2 マット運動ワークシート子どもの記述

- ・私は、開脚好転をするとき、○さんにあごをつけて、勢いよく回った方がいいと言われたので、次からやってみたい。
- ・○さんと□さんのサポートのおかげで、うまく回れたから、うれしかった。
- ・○さんみたいに、速くに手をつけるようにしたい。
- ・側方倒立回転で、足がピーンとできた。アドバイスをもらってうれしかった。

ワークシートからは、アドバイスによって技能が向上したことや、アドバイしてくれたことに、喜びを感じている様子が読み取れた(表. 2)。また、先の体育科アンケートにおいて、11 月にも嫌いと答えていた 2 名についても以下のように、嫌いながらも気持ちの変化が読み取れた。(表. 3)

表. 3 マット運動ワークシート子どもの記述

(体育が嫌いと答えた子どもの記述)

- ・自分が補助をして、友だちができるようになったから。
- ・友だちにアドバイスをもらって、少し好きになった。

③Q-U より

今年度の 6 月と 11 月に行った Q-U の結果か

ら学級の変容を見ると、学級生活不満足群に属する子どもが、6月には6名(33%)から11月には0名(0%)に減少し、学級生活満足群は9名(50%)から14名(82%)へ大きく増加していた。

質問項目を個別に見てみると、「あなたのクラスは、みんなでなかよく協力しあっていると思いますか。」では、「とてもそう思う」「少しそう思う」の割合が、6月には60.9%だったものが、11月には100%に向上していた。「あなたは運動や勉強、係活動や委員会活動、しゅみなどでクラスの人からみとめられる(すごいと思われる)ことがありますか。」では、55%から87.7%へ向上していた。また、「あなたはクラスの人にいやなことを言われたり、からかわれたりして、つらい思いをすることがありますか。」では、「よくある」「少しある」が38.9%から5.9%と大きく減少していた。

④考察

以上のことから、「見合う」「支え合う」「知らせ合う」体育科の授業は、技能の向上のみならず、子どもの意欲を向上させることが分かった。また、教科活動・教科外活動での目標達成による自己肯定感の向上や、友だちの役に立てたという自己有用感の向上は、学級への所属間に大きな影響を及ぼすことが再確認できた。

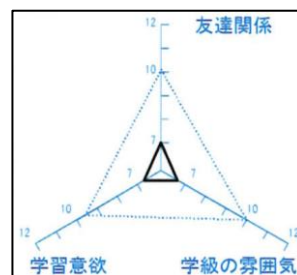
Q-Uの質問から、互いに認め合うことができ、友だちから侵害行為を受ける心配のない学級では、個別の子どもの学級への所属感も大きく向上することが確かめられた。

(2)個別の子どもの変容から【A児(女子)】

①実態

真面目で生活態度も良好だが、学習や運動に自信がなく、学級集団の中でも自分の思いを表現することができないことが多い。6月に行ったQ-Uの学校生活意欲プロフィールでも、その様子を読み取ることができる。(図.6) また、体育科に対しても、苦手意識が強く、体育科のアンケートにおいても常に、嫌いのポイントがマイナス5である。理由の記述で

も「できない技が多いし、コツをを考えてやる



のが大きらい。」と今まで失敗体験からの苦手意識が、意欲を大きく下げていることが分かる。

図.6 A児6月プロフィール

②体育科の授業での取り組みと考察

このような実態のある子どもに対しても、体育科の授業の中で、「見合う・支え合う・知り合う」学習活動を行ってきた。

まずは、A児が比較的関わりやすい子どもを同じグループに配置するようにし、関わり合いに対するハードルを下げるようにした。次に、ワークシートを基にした話し合い活動で、指差しで自分の意見を伝える方法を指導し、実践できるようにした。(図.7)のように、徐々に友だちと意見を交わすことができる姿が増えてきた。



図.7 自分の取り組む技を伝え合う姿

友だちとの関わりが増えていくことで、徐々に意欲が向上し、自分で選択した運動に取り組むようになった。取り組む中で、友だちから補助を受け、動きや記録が向上したことで、本人の意識にも変化が表れ始めた。ワークシートの記述にも、「後転がだいたいできるようになった。」「〇さんに、こしをここに着いてと言われて、後転ができた。」などと肯定的な記述が増えてきた。

Q-Uのプロフィールでも、「友達関係」と「学級の雰囲気」の項目が上昇していることから、本人が学級集団の中で認められ、自分の居場所があると感じ始めていることが分かる。(図.8)

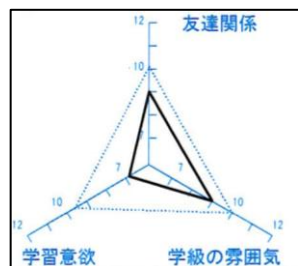


図.8 A児 11月プロフィール

(3)個別の子どもの変容から【B児(男子)】

①実態

運動能力が高く、特に球技や器械運動が得意である。体育の時間を楽しみにしているが、失敗や意にそぐわない判定を受けると、激高してしまうことがある。友だちに自分の思いを上手く伝えることができずに、イライラし怒りだしてしまうことも多い子どもである。

Q-Uの学校生活意欲プロフィールでも、「友達関係」「学級の雰囲気」の数値が、最も低くなっている。このことから分かるように、本人にやる気はあるが、友だちと良好な関係を築くことができずに、学級への所属感は低いことが分かる。

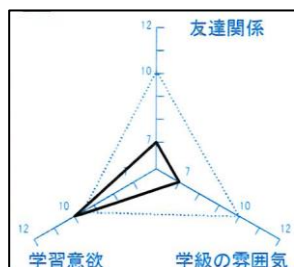


図.9 B児 6月プロフィール

体育科のアンケートでは、常に好きと答えており、ポイントもプラス5から変動はない。その理由として、「体育が得意だから。」と挙げており、自身の運動能力に自信をもっていることが分かる。

②体育科の授業での取り組みと考察

A児とは違い、体育科に対する意識は肯定的であるため、「見合う・支え合う・知り合う」学習活動の中で、高い運動能力を生かし、友だちから認められる場面を意図的に設定した。まずは、難度の高い技の手本に指名し、全員の前で試技をさせたり、互いの良いところを知らせ合う場面を設定したりした(図.10)。



図.10 難度の高い技の試技

友だちから自分の得意なことを認められる機会が増えたことで、徐々に自己肯定感も向上していく様子を感じられた。B児が友だちにアドバイスする機会も増え、同じグループの子どものワークシートには、「Bさんがアドバイスしてくれたからできた。」といった記述も見られるようになった。友だちから感謝されることも、B児にとって自己有用感を高めることにつながっており、友だちへの関わりがさらに増加することにつながるなど、良い循環が起こっている。

日常でも、友だちとの関わりが大幅に増え、特に今までほとんど関わることのなかった、女子との関わりが良くなった。休み時間には、下級生を相手に、長縄を回しながらアドバイスをしている姿も見られるなど、体育科の授業に中で行ってきた「見合う・支え合う・知



図.11 長縄のコツを教える姿(手前)

り合う」という関わりが、教科以外の場面でも活用されていた。(図.11)

Q-Uのプロフィールでも、「友達関係」と「学級の雰囲気」の項目が大きく上昇していることから、本人が学級集団の中で認められ、

自分の居場所があると
感じている
ことが分かる。
(図. 11)

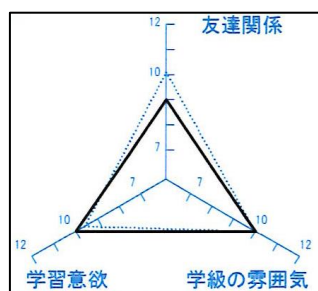


図. 11 B児 11月プロフィール

5. 総合考察

本研究では、子ども同士の親和性を高める場面の一つとして、体育科の授業において、体育科の見方・考え方の趣旨を生かした支援・指導を、意図的・計画的に行ってきた。

2学期の末に行った、学期末の振り返りの「仲間と協力して達成できたこと」の項目では、教科においては、41%の子どもが、体育科の授業を書いていた。(表. 4)

表. 4 2学期末の子どもの振り返り

- ・マット運動で補助をしてもらい技が成功した。(A児)
- ・体育で、アドバイスなどをし合い、上達した。
- ・鉄棒のコウモリふり下りで、○さんとBさんがサポートしてくれたからできた。
- ・マット運動で、○さんと□さんの補助をして、協力することができた。

このことから、子ども達の意識の中にも、体育科で行ってきた「見合う・支え合う・知り合う」学習活動が浸透しており、こうした関わり合いが課題解決に生かされていると感じていることが分かる。

これまで行ってきたアンケートや、Q-Uの結果から、学級の親和性が高まっていることが分かる。その要因として、2学期の感想の記述から、教科活動の中では特に体育の影響が大きいと子ども達も感じている。(表. 4)

体育科の見方・考え方である「する・見る・支える・知る」の視点を生かした授業は、技能の向上だけでなく子ども同士の関わりにもよい影響を与えていると言える。

学校の教育課程における集団形成の要は、特別活動である。今回の研究では、往還の関

係にある教科活動の中から体育科を選択し、体育科で得られた学びや関わりの視点が、他教科や特別活動、行事にも往還の関係として、生かされるようにした。その結果、一定の成果をあげることができた。一方で、課題がなかったわけではない。子ども達それぞれの個別の課題に向き合っていくためには、集団活動と並行して、個別の対応を丁寧に行っていく必要があることも再確認できた。

現在、学校現場に求められることは多く、教師の多忙化が問題となる中で、学級の集団づくりに多くの労力を割くことが難しくなっている。しかし、学級が安心して活動できる状態になっていることは、学習効果を上げるだけでなく、その他の諸課題の防止や解決にも大きく影響する。だからこそ、特別活動を要として、学校生活の中でもっとも多くの時間をかける教科学習を有効に活用して、集団づくりをしていく必要がある。

学校の教育活動全般を通して、子ども同士の関わりを活性化していくことで、子ども達にとって安心して学べる学級へ近づけるよう、今後も実践を積み重ねていきたい。

6. 参考文献

- 中央教育審議会答申(2017) 新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について(中間まとめ) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1400723.htm 2018. 11. 6 閲覧
- 河村茂雄(2012) 学級集団づくりのゼロ段階 図書文化
- 河村茂雄(2008) hyper - QU 図書文化
- 戸田克・川野幸一・櫻井昇一(2010) マット運動の指導法 小学館
- 文部科学省(2017) 小学校学習指導要領解説 体育編
- 文部科学省(2017) 小学校学習指導要領解説 特別活動編
- 文部科学省(2014) 小学校体育(運動領域) まるわかりハンドブック(高学年)